

グロテスク～Aゴシックすごい

GE Gravenによる



第16章



ラザロは干し草を詰めた麻布のベッドに横たわっていたが、頭は別のところにあった。

馴染み深くも果てしない夢の集合体。そして彼は、夢が悪夢へと変わったとしても、容易に自分を奮い立たせて、より心地よい夢の世界を作り出すことができると十分に理解していた。しかし、おそらく奇妙な知覚の転換によって、ラザルスは目覚めるべき唯一の悪夢は、粗末な扉の向こうに閉じ込められているという現実だと悟った。そうして彼は、さらに深く夢の中へと沈んでいった。結局のところ、彼は草の生い茂る丘の頂上に一人座り、小鳥のさえずりを聞き、夏の太陽の暖かさに身を委ねていたのだから。

鮮やかな緑と深い青が織りなす景色　なだらかな丘陵と広大な空が四方八方に広がっていた。あたりを見回すと、ようやく背後の丘の上にそびえ立つ城に気づいた。細長く幅の広いその建物は、緑と青の地平線を突き破るように、まばゆいばかりの白さで天高くそびえ立っていた。段々になった壁の幾重にも重なる面は、窓も扉もなく、まるで完全に滑らかに見えた。彼は立ち上がり、城に向かって歩き出した。振り返るのは一度だけ。まるで、自分がそこから離れている間に、干し草のベッドで眠っている自分の姿を、偶然にも垣間見ることができるかもしれないと思ったかのようだった。

建物の狭い側に近づくと、彼は白い扉が一つだけあるのを見つけた。扉の枠の周囲を走るかすかな隙間から、かろうじてその存在がわかる程度だった。ラザロは扉を開けると、中へと続く暗い廊下が現れた。修道院のベニオンの扉のように。

トンネルの壁の石はカタコンベのような灰色で、湿気で光っていた。そして、同じ甘い腐敗臭が湿った空気に漂っていた。好奇心が彼を駆り立て、彼は這い出した。瞳孔はどんどん膨らみ、暗い廊下の曲がりくねった道を追っていた。湿った廊下の敷石の上では、足は氷のように冷たかった。別の角を曲がると、彼は立ち止まり、遠くから響く叫び声に耳を澄ませた。目の前には、照明の当たった廊下の一部が柔らかな光を放つ旗が彼を誘った。

ラザロにとってそれは全くの夢だった。彼は光を頼りに進み、入り口を見つけた。角を曲がって覗くと、大勢の人々でいっぱいの広い部屋が見えた。彼は中に入ったが、到着しても誰にも気づかれなかった。周囲を見渡すと、まるで彼の存在が部屋の中で起こっていることに何の影響も及ぼさないかのようなようだった。彼は周囲の様子を観察した。松明で照らされた壁には、ブロードソードを持った薄着の兵士たちが並んでいた。そして彼の前には、ローブをまとい、フードを被った男が祭壇のようなテーブルの後ろに立っていた。

彼の傍らには背の高い杖が立っていた。ラザラスはすぐに彼が何らかの司祭だと分かった。ラザラスは彼の顔立ちを判別できるような微妙な特徴を探したが、フードの下には影のような黒さしか見当たらなかった。しかし、石のテーブルの表面は明らかに焼け焦げて黒ずんだ表面がはっきりと見え、おそらく以前に頻繁に火事があったことを物語っていた。それは黒かった。かつて修道院の地下墓地の壁を飾っていた煤で覆われた彫刻の塊よりもさらに黒かった。彼は祭壇の後ろを見て、突然司祭の隣に現れた男の方を見た。その男は大柄で裸で、みすぼらしい身なりをしており、ラザロをじっと見つめていた。

「彼を連れ出せ！」司祭は入り口に向かって叫んだ。エルジョはくると振り返ると、二人の兵士が慌ただしく部屋に入ってきて、瘦せこけた裸の捕虜を引きずり込んできたのを目にした。ラザラスは一步後ずさり、首を傾げ、汗だくの男の絶え間ない苦悩の背後にある意味を読み取ろうとした。そして、男は捕虜たちに対して狂暴だった。蹴ったり、息を吹きかけたり、唇から泡を吹いたり、目を回したり、腕を振り回したりしていた。

骨ばっていて毛のない頭がぐるぐる回っていた。二人の兵士は部屋の中央で男を止め、無理やりひざまずかせ、両腕を広げて伸ばし、その位置に立たせた。

「彼を正さなければならない！」顔のない司祭はそう叫び、石の床を杖で叩きつけた。

「正されたのか？」ラザロは尋ねた。

司祭は振り返って彼に告げた。「彼は治療しなければならない。」

ラザロは司祭の隣にいるみすぼらしい男を見たが、男は冷たい視線を向けたまま頷くだけだった。ラザロは顔を背け、「治ったのか？」と独り言を言った。しかし、その野蛮な男の目をつける前に、屈強な兵士がブロードソードを振り下ろし、男の首を切り落とした。首はラザロのそばの床を転がっていった。ラザロは飛び退き、二人の兵士がまだしっかりと押さえている首とぐったりとした胴体の間を視線を走らせた。

たちまち、動物の皮を身にまとった二人の肥満体型の小人が部屋に入ってきた。一人は湾曲した彫刻刀を、もう一人は石工用の木槌と長い鉄の釘を携えていた。ナイフを持った小人は死体に向かって駆け寄り、首の切り口から肉片を削り取り、ブロードソードで切りつけられた角張った傷を平らにした。もう一人の小人は死体の首を拾い上げ、胴体の後ろの方へ運んだ。

すると二人の小人は息の合った作業に取り掛かった。一人目が体をかがめて膝に手をつき、もう一人が頭とハンマーを持ったまま背中に登った。上の小人は頭を胴体の後ろに置き、口を開けて鉄の釘を舌に突き刺し、頭を胴体にしっかりと固定した。そして、現れた時と同じように素早く、二人の小人は部屋を出て行った。

感覚が麻痺したラザロは、その異様な光景から目を背け、司祭に問いかけた。

"なぜ?"

それに対し、司祭は冷静にこう答えた。「彼は悪魔だった。彼は壊れていたが、今は修復されたのだ。」

「治った? いや、壊れている!」ラザロは叫んだ。「彼は死んだ!」

「彼はもはや激しい情欲に悩まされることはありません」と司祭は説明した。「彼は自分自身と和解し、今は落ち着きを取り戻しています。」

「彼の頭は後ろ向きだ! どうやって治すんだ?」

しばらくの間、顔のない司祭はラザロをじっと見つめていた。それからフードの下で頷き、彼に話しかけた。「お前もまた激しい情熱に駆られ、同じように打ち砕かれているようだな。」彼はラザロを指差し、兵士たちの方を向いた。「彼も治してやれ。」

血に染まったブロードソードを持った大柄な兵士がラザルスに向かって歩み寄ると、ラザルスはどもりながらゆっくりと後ずさりした。「いいえ、私はもう治っています。つまり、私は…」

ラザルスはぐるりと向きを変えて部屋から逃げ出し、来た道を駆け抜けた。すると、かつて見慣れた廊下の曲がりくねった道が、突然変わってしまったことに気づいた。角を曲がるたびに、通路が枝分かれするたびに、まるで廊下がトンネルの網に爆発したかのように、さらに多くの通路が分岐し、外見上は逃れられない黒い迷宮を形成していた。そして、新しい通路には前の通路よりも多くの階段があるように見え、どの方向へ進んでも、彼を巨大な白い城のより高く、より深くへと導いているかのように感じた。そして、修道院の地下墓地を追われていた時の兵士たちの慌ただしい足音と叫び声を思い出したちょうどその時、

彼は今、追ってくる衛兵たちの似たような音を聞いた。しかし、頭の中では、それはただの夢だと分かっていた。なぜなら、彼の体は別の場所、彼とは別のどこかに、粗末な扉の向こうに閉じ込められ、死のような静寂の中で、まるでバストンの地下墓地の死体のように、微動だにせずに横たわっていたからだ。

それにもかかわらず、ラザロは別の角を猛スピードで曲がり、粗末な鉄の留め金が付いた扉を見つけ、そこを素早く通り抜けて中に閉じこもった。

兵士たちが次々と彼のそばを通り過ぎ、足音は遠ざかっていった。ラザロは戸口に寄りかかり、ため息をついた。

「ここにいてはいけない」と、彼の背後から喘ぎ声のような声がささやいた。

驚いたラザロは素早く振り返った。彼の目の前、狭くて密閉された雑然とした部屋には、男は柱のあるベッドに横たわり、頭だけが見えるようにシーツがかけられていた。そしてその下には近くの油ランプの明かりで、ラザロはその男の顔に見覚えのある特徴を見つけた。

「どうしてあなたはここにいて、あそこにいるの？」ラザロは指をさしながら尋ねた。彼が来た方向。

「ああ、いや、私じゃない。私たちは容姿がよく似ているんだ」と男は病的な、空虚な声で明かした。「司祭の隣に立っていたのは、私の邪悪な弟だ。奴はお前を見つけたら殺すだろう。ここは安全じゃない。奴は来る。いつもここに来るんだ。」男は咳き込み、うめき声を上げながらげっぷをし、まるで急に体の芯まで冷え切ったかのように、シーツを首にさらにきつく引き寄せた。

「どうしたんだ？」ラザロは前に進み出て尋ねた。

「お優しい方ですね、若者。私はもう以前よりずっと良くなりました。しかし、どうかここを去ってください。さもないと、彼が私を襲ったように、あなたも襲われるかもしれません。」

ラザロは立ち去ろうとドアの方へ振り返ったが、足音が次第に大きくなり、かつて自分が逃れた兵士たちの物音も聞こえてきた。彼は部屋を見回しながら男に近づき、「ここから出る別の道はありますか？」と尋ねた。

「隠れなければ！」男は答えた。「奴が我々を狙っている！」男はベッドの反対側に転がり、体を起こしてラザロに背を向け、肩越しに彼を見ながら叱責した。「お前はここにいるべきではない。私の休息を邪魔するなんて！なのに、ここにいるとは！」

外から叫び声が聞こえ、ドアが拳を叩きつけるようにガタガタと音を立てた。

「さあ、お前を彼から隠さなくてはならない！さあ！」彼は立ち上がり、振り向いた。裸の男がラザロと完全に向き合ったとき、エルヨは内臓が溶けるような感覚を覚えた。男の胴体全体が完全に空洞で、きれいに内臓が抜き取られていたからだ。

臓器の空洞には、部屋のランプの光に照らされて光る、肋骨状の口を開けた赤い組織の子宮だけが残っていた。空洞の男はベッドの周りを駆け回り、自分の空洞の中を指さした。「急げ！隠れろ！」

ドアを叩く音が続く中、ラザロは彼から一歩下がった。「中にいるのか？」

いいえ、別の場所へ案内してください。

「他に逃げ場はない！さあ、中へ入って来なさい。私が彼を救い出してあげよう！」

まるでドアの板が、大軍の鼓動の轟音でガタガタと音を立てているかのようだった。

ラザロは折れて、男の温かく湿った体腔の中に全身をゆっくりと入れた。

中に入ると、ラザロはまるで母親の袋の中の有袋類のように、人間の殻から顔を覗かせているように見えた。ラザロと共に、外見上妊娠している男は向きを変え、部屋の奥の壁に向かって歩き、夜空が見える唯一の開いた窓へと近づいた。

「しかし、壁には窓が見当たらなかった」とラザロは言った。「日の光ももうないのか？ どうしてそんなことがあり得るのか？」

「黙ってる」男は小声で彼を叱った。「見つかるといけないぞ！窓の外に隠れて、部屋が空っぽだと思わせよう。」男が窓枠にまたがると、ラザロは地面をちらりと見た。地面は、何段もの階段を合わせた高さと同じくらい遠くにあるように見えた。

男は、空っぽの男の部屋を見つける前に、以前に登ったことがあると言い、「我々は人目につかないように首を吊ろう。彼は中に誰もいないことに気づかず、別の場所で搜索を続けるだろう」と付け加え、指だけで城の外壁にぶら下がり、落下しないように支えていた。

「他の場所？」ラザロはそう尋ね、身をよじったが、男の肋骨の中に翼がしっかりと挟まっているのを感じた。

「じっとしてろ 静かに！」ドアがガシャンと音を立てて、邪悪な弟が侵入に成功したことを示唆したとき、男は低い声で言った。

ラザロは息を呑み、善人の邪悪な双子の怒鳴り声を聞いた。「彼を逮捕しろ。剣は使えな！あの壊れた少年を無傷で連れて行け！」彼にとってそれはまさに、ボーン大尉と呼ばれる男の声だ。

窓の外から聞こえてくる騒ぎを聞いていたラザロには、まるで兵士たちが部屋の隅々まで荒らし回ったかのように思えたかもしれない。その後、再び静寂が訪れ、搜索隊が移動したことを示唆していた。

突然、上空からボーン大尉の威嚇的な声が聞こえてきた。「ほら、お前は腹の中にヨナを抱えているのか。」

「だめだ！お願いだ、兄さん！窓から入れてくれ！二人とも抱えきれないんだ

私たち！"

「そろそろ時間だ、兄弟。君は正しく修復されていない。何かがおかしい。」

「助けて 私は落ちていく」

ラザロは、骨が抜け落ちた男の体から腕を伸ばし、崩れ落ちていく岩棚につかまろうとした。彼は肋骨の檻に閉じ込められたまま、地面に向かって落下していった。

ガシャン！彼は息を呑むほどの力で地面を叩きつけた。しかし、彼は男の壊れた殻から這い出し、彼を奮い立たせようとした。「我々は

「逃げろ！急げ！」しかし、善良な男は死んでいた。ラザロは恐ろしいことを考えるために立ち止まった。それらの出来事は、まるで悪夢の始まりのようで、もしかしたら彼は何らかの方法で目を覚ますことで、この瞬間から逃れることができるかもしれない、と彼は思った。

「グルルル！」ラザロが振り返ると、大きな赤い犬が自分の尻尾を追いかけていた。彼はゆっくりと立ち上がると、その毛むくじゃらの獣は突然立ち止まり、まるで彼に気づいたかのように振り返った。そして、這い出てきて立ち止まった。星明かりの下で、ラザロはその獣の病的な姿を見た。目は涙ぐみ、口からは泡を吹き、足はふらつき、深紅の毛は脂ぎって絡まっていた。それはまるで、自らの存在を認めようとしない四つ足の死神のようだった。獣は正気を失い、折れて腐りかけた牙を見せながらラザロに懇願した。「お優しい方、あなたの首にキスをさせてください。お願いです、どうか助けてください。」

元気であること。

「ああ、ごめんなさい。私には…できないんです」ラザロはそう呟き、明らかに死にかけている犬から後ずさりした。彼は自分の居場所を探し、自分が白い城の跡形もない、人里離れた丘の上にいることに気づいた。木々もなく、広大な黒い空の下に果てしなく続くように見えるなだらかな丘陵地帯と、目の前にいる病弱な獣以外には、何も見えなかった。

「でも、あなたはそうしなければならない」と動物は心の中で主張した。よろよろと進み、腐った歯をさらに見せながら、二人の間の距離を縮めた。「私が求めるのは、たった一度のキスだけだ。」

私を信じてください。私は優しく接しますから。

ラザロは首を横に振った。「いや、できない。君には何か問題がある。それに、君が私に求めていることにも問題がある。」

「何も問題ないわ。キスを一度すれば治るわ。」

「その後、私はどうなるのでしょうか？」ラザロはそう尋ね、慌てて後ずさりした。

その獣は彼の後を小走りで追いかけてながら、「親切な紳士よ、ほんの少しだけ首筋を貸してください」と独り言を言った。

ラザロは振り返って走り去った。彼は空高く舞い上がり、翼を広げて夕空を目指した。

死の犬は彼の後をついて行った。走り出すことなく、彼のすぐ後ろを小走りで進み続け、心の中で「あなたの首ですか？」と繰り返していた。

ラザロは翼を羽ばたかせたが、高度は上がらなかった。何度も何度も飛び出し、もがき苦しんだ。

彼は翼をはめて立ち上がり、まるで翼を切られた鳥が飛ぼうとしているように見えた。ラ

ザロには、空気の張力が失われ、翼がほとんど揚力を発揮できなくなっているように思えた。そして彼は後ろを振り返り、犬を見た。

獣は依然として彼の後を追っていたが、今度は後ろ足で直立して小走りで歩き出した。

「首ですか、旦那様？！」

ラザロは翼をたたみ、全力で走り出した。丘を越えて、彼はグロテスクな獣から逃げたが、一向に前進できなかった。まるで空気がゼリー状になったか、あるいは水の中を進んでいるかのようだった。土地は果てしなく、でこぼこで、あらゆる方向に広がっていたので、彼は隠れる目立たない場所も、まっすぐ進む道も見つけられなかった。そして彼にとって、

何よりも厄介だったのは、彼が夢を見ているのではない、つまり、あらゆる意味で容赦ない悪夢のように思えるこの瞬間から、簡単に目覚めることができないという考えだった。

再び振り返ると、直立していた犬は、白い城で見たフードを被った司祭の姿に変わっていた。

「首ですか、旦那様？」司祭は背の高い杖を振り回しながら彼を追いかけ、叫んだ。「直してください自分！」

「いやだ！」ラザロは唾を吐きかけた。「放っておいてくれ！」

「いやだ！」ローブを着た男は繰り返した。「私を治してくれ！」

ラザロは歩みを止めずに、男がフードを脱いで見慣れた顔を現すのを見た。それも双子の兄弟のものであった。これで3人になった。

彼は水のような風にも身を任せながら、両手が地面にほとんど触れるまで前に押し出した。それから草をつかみ、腕をもう一本の足のように使って走りながら、体を前に引きずり出した。足を踏み出すたびに、指で地面を引っ掻き、地面をますます速く引きずっていった。再び、彼は

彼は後ろを振り返り、自分と司祭との距離がどんどん広がっていることに気づいた。すると彼は四つん這いになって勢いよく飛び出し、丘を駆け抜け、前へと道を切り開いていった。その時、彼の顔つきが突然変化したのを目にした。長い鼻面が視界に突き出てきたのだ。そして彼はまるで野犬のように、風に向かって飛び出した。

ドスン！ラザロはベッドから飛び起きた。部屋には松明と武装した兵士たちが溢れ、彼を取り囲んだ。そして、一見すると漠然とした、しかし圧倒的な出来事の中で、ラザロは縛られ、部屋から連れ出された。男たちは彼を廊下へと引きずり込み、そこは落とし穴の扉からさらに遠ざかり、城の中心部へと続いていた。

整列した兵士たちが、途切れることのない通路、曲がりくねった階段、そしてより広い2階の廊下へと続く彼の行く手を阻んでいた。護衛兵たちはラザロをアーチ型の入り口へと導いた。移動中、干し草、汗、尿、そして血の混じった臭いがますますはっきりと感じられ、ラザロはエルジョの鼻をしかめた。

やがて、壁が崩れて広大な空間が現れた。そびえ立つ壁とアーチ型の天井を持つ大広間だ。男たちは彼を広間の中央に連れて行き、

彼らは、周囲の壁に立っている仲間の兵士たちに合流し、ラザロにそこに留まるよう命じた。そしてラザロの登場は、ホール全体に響き渡る一連のささやきと息を呑む音を引き起こし、多くの音が混ざり合っ一つ音となり、それは巨大な蛇の絶え間ないシューという音に似ていた。ラザロは広間を調べ、集まった群衆。

彼の左手には、途方に暮れた女性たちと怯えた子供たちが、一連のアーチ道の前に身を寄せ合っていた。その中に、彼に仕えに来た従者の見慣れた顔を見つけたが、彼は彼に肉を持たせて帰らせた。しかし、洗濯女とその3人の侍女の姿は見えなかった。そして、召使いと子供たちの向こうには、彼をよく見ようと首を伸ばしている兵士たちの列があった。

彼の前には、壁から舞台のような一段高い台が伸びており、その上には聖歌隊のように数列の男たちが立ったり座ったりしていた。中には正装した騎士もいれば、高官のローブをまとった者もいたが、ほとんどは質素な服装だった。彼らの目の前には、長い多脚のテーブルが台座の上に置かれていた。ぼろぼろでよれよれのテーブルクロスが天板の3分の1を覆い、余った部分は敷石の上に垂れ下がっていた。布には茶色い斑点や汚れが付着しており、振り下ろされた剣から飛び散った血痕を示していた。天板の露出した部分には、兜や刀剣類、その他の雑多な物が散乱していた。

テーブルの右端には、精巧な彫刻が施された、一部破損した椅子に男が座っていた。足を組み、足を高く上げ、血に染まったブーツをテーブルの上に載せたラザロの姿は、絶対的な権力者の存在感を暗示していた。

権威 彼はテーブルに座っている唯一の男だった。その男はかなりの背丈で、目は大きく離れ、頬は広く、顎鬚は濃い。濃い髪は、まるで汗で蒸れたヘルメットに押しつぶされたかのように、頭にぴったりと張り付いていた。右腕には包帯を巻き、無事な方の手には羊皮紙を握っていた。全体的に、彼の姿勢や態度は、突然の出来事に気を取られ、思考が乱れた、悩める男のそれだった。

彼の右側には、高い壁に沿って等間隔に並んだ巨大な木製の柱の前に、準備万端の弩兵たちが整列していた。壁の中央には大きな入り口があり、その枠と鉄の留め金が付いた両開きの扉は、傷だらけで歪んでいた。扉は不均等に閉まっており、ラザロは夜空を垣間見ることができた。そして彼は一番上の柱を見つけた。城壁の頂上から彼を見つめる三日月のような曲線。

「空がこれほど近く感じられたことはなかったし、同時にこれほど遠く感じられたこともなかった」と彼は思った。

彼は後ろを振り返り、自分が来た廊下の入り口の方を見て、

兵士で同様に混雑していたが、隣接する後壁は無防備で、その基部には干し草を詰めた麻布の寝具が積み上げられているだけだった。壁面には、色鮮やかな紋章や家紋が刺繍された、古びたタペストリーが掛けられていた。しかし、タペストリーは左右対称に配置されていたため、その間に空白部分が目立っていた。そこは壁の石の色が明るい部分で、何かで覆い隠した方が良さそうに見えた。

「ラザロ・ゴグ、あなたはそうおっしゃるのですか？」

ラザロが振り返ると、その男は立ち上がっており、手にはまだ羊皮紙を持っていた。

「我こそはヒューゴン卿。この地を統治する者だ。」

「閣下。」ラザラスは深くと頭を下げて彼に挨拶した。彼は体を起こしてヒューゴンを見た。羊皮紙をじっと見つめながら調べる。

ラザロは、彼が本を読んでいる間、首を傾げ、唇をすぼめて眉を上げ、顔を上げて彼をじっと見つめるのを見た。

それに対しラザロはうなずき、簡潔に「主よ」と答えた。

「そうおっしゃるのですね」とユゴンは声を張り上げた。彼は後ろを振り返り、聖歌隊のような配置の中からローブをまとった高官を呼び寄せた。その男がテーブルに着席すると、ユゴンは彼は羊皮紙をラザロに向け、「それで、私は見てみよう」と付け加えた。

ラザラスは、身なりの整った中年の男が、テーブルの上に新しい羊皮紙の山を積み上げるのを見ていた。ローブをまとった男は、羊皮紙の山の横にインク壺と羽根ペンをいくつか置き、それから真鍮のような三脚式の装置の複雑な組み立てに取り掛かった。ラザラスはため息をつき、傷だらけの廊下の扉と、露わになった月をちらりと見た。

「ゆっくりと前に進み出ろ」とヒューゴンは命じた。

ラザロが近づこうとした時、ヒューゴンは手を差し伸べて彼を制止し、「そこでじっとしていなさい」と言った。

ラザロはそれに従い、男が金属製の装置を入念に準備している様子に再び注意を向けた。その珍しい装置は、3本の脚を広げた状態で高さが30センチ強あり、枠の中に直径30センチ弱の凹型の真鍮製の皿が垂直に固定されていた。ラザロは、皿の内側が真鍮製の鏡のように輝いているのに気づいた。表面全体がキラキラと光っていたが、薄く途切れのない、磨かれていない縁の帯だけは例外で、そこには精緻な彫刻が施されているようだった。男は皿をブラケットに固定し、取り付けられたレバーで水平方向と垂直方向の角度を調整しながら、ラザロはその粗削りな裏側を観察した。その表面には、翼のある蛇が自分の尾を食べている、大きくて装飾的な彫刻が施されていた。

しかし、この装置の複雑さと並外れた設計は、皿だけにとどまらなかった。男性に最も近い位置にある三脚の2本の脚は、吊り下げられた突き出た棚を支えており、その上には、スライド式のシャッターが付いた小さな反射板が取り付けられていた。男は中に火のついたろうそくを置いた。真鍮の鏡に焦点を合わせながらシャッターを調整し、ラザロが男の顔が炎の反射で光るのを見たとき、男は彼はヒューゴンの方を向き、目を輝かせながら頷いた。しかし、準備にもう少し時間が必要だと言わんばかりに、指を上げて合図した。

ラザラスの視線もヒューゴンの方へ向けられた。しかし、視線を巡らせるうちに、テーブルの後ろに聖歌隊のように並ぶ人々の中に見覚えのある顔を見つけた。そして、その顔には、他ならぬダルシクール卿の、思いがけず冷たく遠い視線が向けられていた。ラザラスは、もしかしたら何らかの助けの手を差し伸べてくれるかもしれないという希望を抱いて、彼と視線を合わせた。しかし、ダルシクールは座っている別の男の肩越しに彼をじっと見つめるだけで、ラザラスにはただ無表情な視線を向けるだけだった。

ヒューゴンは羊皮紙を振りながらラザロに問い詰めた。「私の手には、あなたの言葉が記録されている。あなたは自らをラザロ・ゴグと名乗り、キリスト教徒の空飛ぶ男だと言っている。」

ヒューゴンは眉をひそめ、うなずいた。「様子を見よう。」

「ダルシクール卿よ」ラザロは廃位された領主の方角に向かって叫んだ。「もしよろしければ、どうかお力をお貸しください。」しかし、ダルシクールは姿を現さなかった。

「黙れ！」ヒューゴンはそう叫び、羊皮紙をテーブルに投げつけると、一段高い台から飛び降りた。そして短剣を抜きながらラザロに突進した。

ラザラスは息を呑み、ヒューゴンが刃を彼の喉元に突きつけた。

ヒューゴンの言葉が広間に響き渡った。「この地の唯一の領主は私だ！」

もう一度彼の名を口にしたら、お前の首は私の足元に転がるだろう！私を集めるつもりか？

ラザロは唾を飲み込み、うなずいた。「主よ、お許しください。」

「今回だけだ」とヒューゴンは厳しく答えた。「このような罪は一度しか許さない。」

「慈悲深い方ですね、閣下」とラザラスは言い、ヒューゴンの手にある刃に視線を落とした。

ヒューゴンはナイフを引っ込め、「確かにそうだ。だが、寝ている間に私を殺そうと企むような連中とは一緒にいられない」とぶつぶつ言いながら、ラザロの腕をつかんで、ローブを着た男とその奇妙な真鍮の装置のところへ連れて行き、「料理はできましたか？」と尋ねた。

「もう少しだけ」と男は言い、強いイタリア語訛りでヒューゴンを訂正した。「ムーンウィンドウ、閣下 それは料理ではありません。」

「急げ！」ヒューゴンはラザロの方を向きながら男に怒鳴った。「どうしても知りたいのだ。」

彼はラザロの目をじっと見つめ、「本当に青い、まるで深海のようだ」と独り言ちた。そして、刃をラザロの頬に軽く当てた。「口を開けろ」。

ラザロは口を開いた。

「それにしても、なんて大きな歯をしているんだ まるで狼のようだ。」ラザラスが飛び退いて口を固く閉ざすと、ヒューゴンは剣を犬歯に軽く叩きつけた。「確かにそうだ。」ヒューゴンは眉をひそめるラザラスにニヤリと笑いかけ、彼の隣に歩み寄った。

ラザロは彼を横目で見ていた。

ヒューゴンは短剣をそっと動かし、黒髪をかき分けてラザロの垂れ下がった耳を露わにした。「これは一体何の耳だ？猫か、犬か、それとも悪魔か？」

「私はキリスト教徒です、主よ」とラザロは弁明した。

「おっしゃる通りだ」とヒューゴンは答え、彼の背後に回り込んだ。「では、この恐ろしい翼は、一体どの鳥、コウモリ、それとも獣のものなのか？」

「空を飛ぶ男です、閣下」とラザロは答えた。「私はキリスト教徒の空飛ぶ男です。」

「そうおっしゃるが、私は悪魔や竜のスケッチの中でしかそのような翼を見たことがない。それらは羽毛がなく、天使の翼のような美しさも持ち合わせていない。」

「それに、キリスト教徒の空飛ぶ男のスケッチなんて見たことがないよ」とヒューゴンは彼のそばに寄り添い、ささやいた。「それについてどう思う？」

ラザロは顎を突き出し、振り返ってヒューゴンに言った。「もしよろしければ、閣下、私の肖像画を描いていただいても構いません。」

ヒューゴンは一瞬のうちに一歩下がり、剣を振り上げ、そして下ろし、くすりと笑って頷き、「実に巧妙だ。だが、もし君がどうか翼を広げてくれたら、私はなおさら嬉しいのだが」と認めた。

ラザロはため息をつき、翼を広げた。すると、広間中の人々が息を呑んだ。

「黙れ！」ヒューゴンはラザロから目を離せず、怒鳴った。彼は一歩後ずさり、その翼の端から端まで続く堂々たる大きさをじっと見つめ、首を横に振った。「これは天使の翼ではない。あまりにも獣のようで、おぞましいほどだ。」

ラザロは翼を折りたたみ、ヒューゴンは彼の周りを旋回してテーブルの向こう側を覗き込み、彼は半裸の騎士の方へ向かい、「司教と書記官は見つかりましたか？」と尋ねた。

「いいえ、閣下」と兵士はぶっきらぼうに答えた。「そして、彼らは死者の中にはいませんでした。」

ヒューゴンはうなずき、明らかに失望した様子でラザロの方を振り返った。彼は咳払いをして、素早くラザロに近づき、腕を組み直して明らかに反抗的な態度を示した。「宣誓供述書の中で、あなたは休息を必要とせずに半晩飛行できると主張していましたね。」

「はい、閣下。」

ヒューゴンは目を細めて身を乗り出し、こう付け加えた。「そこで私は尋ねたいのですが、『半日』ではなく『夕方』の半分」と言ったのはなぜですか？」ヒューゴンはラザロの方に身を乗り出し、

すぐそばにいたので、ラザラスは彼の鼻から出る息遣いを感じることができた。ヒューゴンはラザラスの革のネックレスを引っ張り、黒いブラウスの下から木製の祈祷十字架を露わにした。「昼間に飛ぶことを妨げるものは何かあるのか？」彼は十字架を指でこすりながら、ラザラスの目をじっと見つめ、

応答。

ラザラスは視線をそらし、考え込むように答えた。「夕暮れの涼しい空は、飛行作業にはより適しています、閣下。」

ヒューゴンは唇をすぼめて返事を考えた末、うなずいた。「確かに、飛行は容易なことではない。月明かりの下で戦う方が良い戦いもあるようにね。」そしてラザラスを鋭く睨みつけ、続けた。「それに、眠りの静寂の中で殺されるのが一番良い人間もいる。」

「おっしゃる通りかもしれませんがね、閣下」とラザラスは答えた。

ヒューゴンは祈りの十字架を放し、一步下がって短剣をちらつかせた。「両手を上げろ。」

ラザラスは顎を食いしばりながら、ヒューゴンが手首を縛っていた縄を切るのを見て言った。「お前は悪魔のような歯を持ち、悪魔のような耳をし、竜のような翼を持ち、そして氷の海のように冷たい青い視線をその目から放っている。」

ロープは滑り落ち、床に巻き付いた。

「閣下、私はキリスト教徒の飛行士です。」

「さあ、どうなるか見てみよう！」とユゴンは叫んだ。

ラザラスは首を傾げた。

ユゴンはこう述べた。「私があなただを束縛から解放するのは、信頼や親切心からではない。」

「閣下？」

ヒューゴンは説明した。「悪魔は縛られている限り、自由になるためならどんなことでも言い、どんなことでもするだろう。今なら、お前は私の前で好きなように話し、行動できる。」ヒューゴンは剣を鞘に収め、両手を差し出した。「私を殺したいのなら、今がその時だ。」

ラザラスはヒューゴンの後ろをちらりと見て、ダルシクルがまだ他の男たちの陰に隠れているのを確認した。そしてヒューゴンにこう言った。「閣下、私は誰にも危害を加えるつもりはありません。」

「お前の願いや言葉など関係ない」とヒューゴンは言い放ち、ラザラスの腕を取ってテーブルに座っているロープ姿の男の方へさらに近づけた。「私はお前の真意を汲み取るだろう」月のプレートから。」彼は男に尋ねた。「準備はいいか？」

「ほぼそうです、閣下」と男は答え、装置の側面を覗き込み、ヒューゴンにささやいた。「これは月面皿でもなく、窓皿でもなく、皿窓でもありません。

「これはムーンウィンドウだ。」

ユゴンは不機嫌そうに手を振って彼を追い払った。「そうだ！好きなようにしろ。私は

さあ、翼のある男をあなたの前に連れてきなさい。」

「月窓でしょうか、閣下？」ラザルスは尋ねた。

ヒューゴンは彼を睨みつけた。「確かに。運命を司る唯一の真の神の目 まだ生まれていない人々の人生と、まだ生まれていない王国の形が永遠に刻み込まれる場所だ」

「石でできている。」ヒューゴンは身振り手振りで手を差し出し、ローブを着た男にラザロを紹介した。「私の素晴らしい占星術師であり司祭でもあるアルベアード・ド・エルホジーをご紹介します。預言者の中の預言者であり、私の個人的な予言者であるアルベアードは、あなたが私の塔の窓から忍び込み、私が眠っている間に短剣で私を殺害するのを目撃した人物です。」

ラザルスは顎を食いしばり、目を閉じ、一見ばかげた告発について考えた。そして短い考察の中で、誰かがヒューゴンに彼と短剣と塔の窓を使った陰謀が計画されていた。彼はダルシクールの方角を見て、彼を探したが、失脚した領主は群衆の中に隠れたままだった。彼はくると向きを変え、召使いたちを捜し、群衆の中に見覚えのある顔を探したが、従者の姿はどこにも見当たらなかった。同様に、洗濯女やその侍女たちもその中には見当たらなかった。ラザロはため息をつき、明白な事実を訴えて弁明した。「しかし、閣下は死んでおられません。そして、私は到着以来ずっと監視下に置かれていました。そのような行為は私にはできません。」

ヒューゴンはニヤリと笑って頷いた。「ああ、でも君はそうしたんだ 今から3晩後のことだったが それでも私は君の殺意を止めた！」

ラザロはめまいを感じ、深く息を吸い込んだ。「閣下、もしよろしければ、あなたの意図が理解できません。」彼は首を横に振った。「もしあなたがおっしゃるように私の手を止めたのなら、たとえ今から三晩後であっても、私はそのようなことはできなかったでしょう。」

それに対してユゴンは、「それは神の恵み、私の占星術師、そして彼の素晴らしい窓ガラスのおかげです」と答えた。

「ムーンウィンドウ様、閣下」とアルベアードは親切に口を挟んだ。

「まさにその通りだ」とヒューゴンは断言し、続けて言った。「アルベアードの贈り物と、彼の祝福された機械のおかげで、私は出来事が起こる前にそれを目撃することができる。本当に、私は自分の運命を見たのだ」

ユゴンは振り返り、広間全体に向かって宣言した。「多くの王国の王となるのは時間の問題だ！」

兵士たちは腕を上げて歓声を上げた。ヒューゴンは微笑んでから静まり返った。彼はホールを落ち着かせる手で包み込んだ。彼はラザロの方を向き、「それは空飛ぶ男と短剣が、神から与えられた私の運命を覆そうとしている。

ラザロはアルベアードの方を見たが、ローブを着た男はただ目を細めてじっと見つめ返し、羊皮紙を自分の前に置き直しながらいった。男は井戸から羽根ペンを抜き、先端を軽く叩いて乾かし、準備を続けることから注意をそらすことなく、

ヒューゴンは告げた。「閣下、時が来ました。」

ヒューゴンはうなずいて同意し、ラザロにその場にとどまるよう命じた。それから彼は石の台座に上がり、短剣を台座の上に投げながらテーブルの周りを回った。

部分的に焦げた椅子に戻ると、ユゴンは広間にいる全員にこう言った。「私の兵士たちは皆、この慣習を知っている。私は完全な静粛を求める。」それから彼は

城の使用人たち。「そして、私の新しい使用人たちにも同じことを守るよう求めます。それに加えて、すべての女性は自分のそばにいる子供の世話をしなければなりません。そして、それぞれが自分の子供の騒ぎについて責任を負わ

なければなりません。私の部下は、あらゆる騒ぎを鎮めるために迅速に行動します。たとえ殴打することになってもです！私の言葉を誤解しないでください。一度それが実現したら、交渉の余地はありません。

完了しました！さあ、新しい役割を担ってください！」

女性たちは集まった召使いたちの間に入り込み、子供たちをつかんで引っ張って彼女たちの胸に指を当て、唇に指を押し当て、耳元で激しく囁いた。

子供たちはうなずき、女性たちは子供たちを抱きしめた。召使いたちの間には、新たな静けさが訪れた。

ヒューゴンは肩越しに振り返り、壁際に並ぶローブをまとった高官や騎士たちの一団に話しかけた。彼は彼らに手を振って退散させ、「我々から離れろ。啓示のための空間を空ける」と言った。波のように、その列は散り始め、ヒューゴンと彼の占星術師だけが入れるようになった。彼は振り返り、ラザロを指さして、簡潔かつ厳しい警告を発した。「動いたり、話したりすれば、お前は死ぬぞ」。それから彼は、ホールの傷だらけの両開き扉に立っている弩兵の列に向かって指を鳴らし、それからラザロに合図を送った。彼らはそれに従い、ラザロに弓を向けた。

ラザルスは息を呑み、ヒューゴンから占星術師、そして彼らの後ろのテーブルで動き回る男たちの集団へと視線を移した。男たちがさらに散っていく中、壁沿いにラザルスは再びダルシクール卿の顔を見つけた。

そして彼と目が合った。しかしダルシクールは他の男たちとは動かず、その場にじっと立ち、冷たい視線を彼に向けたままだった。ラザルスは首を振り、肩をすくめて、無言で「なぜだ？」と問いかけた。

そしてその瞬間、ラザルスはダルシクール卿がなぜこれほどまでに距離を置いているのか、その理由をはっきりと悟った。衝撃的な事実打ちのめされたラザルスは、思わず大きな呻き声をあげ、ホール全体を揺るがした。ダルシクール卿には胴体がなく、代わりに高い床置き燭台の柱だけが、切り落とされた首を支える槍の役割を果たしていたのだ。

「弓を構えろ！奴を撃て！」ヒューゴンは叫んだ。兵士たちは彼の命令に従って飛び、クロスボウ兵が武器を構えると、隣の剣士の列も隊列を離れ、ラザルスに群がり、抜刀した剣で彼を固く囲んだ。「もし彼が

「動け、奴を刺せ！」それから彼はラザロに直接言った。「悪魔の言葉や悪魔の叫び声は一切禁じる！空を飛ぶ人間だろうが何だろうが、もしもう一度私に悪態をついたら、その場で死ぬことになるぞ。」

「汝、～してはならない」

"沈黙！"

ラザロは目をそらしたが、どの角度から見ても、振り上げられた刃ばかりが見えた。一筋の汗が目に染み、耳が熱くなり、クロディウス修道士と彼が振り上げた懲罰用の杖の記憶が脳裏をよぎった。

ヒューゴンは占星術師の反対側を慌ただしく歩き回り、指を鳴らしながら月の窓を指さした。

占星術師は、インクをつけた羽根ペンを白紙の羊皮紙の上に置き、鏡張りの皿の前にまっすぐ体を傾けた。

ホール全体に、咳やくしゃみさえも、厳粛な静寂を乱すものではなかった。占星術師は、月の窓から差し込む光に魅せられ、そこに座っていた。

ラザルスは男に視線を集中させた。男の鋭い視線は、三脚台の反射板の光と一体化した。男の眉はこわばり、まるで獲物を探す猛禽類のように目は引きつり、外界を見つめていた。男は唇を震わせながら何かを呟き、ヒューゴンは邪魔にならないようにそっと後ずさりした。

ヒューゴンはアルベアードの背後に忍び寄り、肩越しに何も書かれていない羊皮紙を覗き込んだ。催眠術にかかった占星術師は、自分の仕掛けに釘付けになりながらも、ヒューゴンが口ずさむ言葉を書き留めていた。

ジャッカルの野生動物が集まる場所

悪魔たちが野次を飛ばしながら集まる
静かに佇むフクロウの巣の上に
破壊的な天使の影が横たわる

彼の種を盗むような情欲を呼び起こす

夢の中で、この悪魔の女王は、

男とスパーリングをしている間、彼女は

占星術師は、月光に照らされて顔が明るく輝くヒューゴンの方を向いた。

「まさか！」彼は息を呑み、目に涙を浮かべた。

ヒューゴンは身構え、考え込んだ。「一体何だろう？」

たちまち、ムーンウィンドウは二人の男の注意を引いた。それは青みがかかった光を放ち、その中心からより明るい青い光の点が外側に向かって広がり、膨らんでいった。

青い輪となってゆっくりと外側へ広がり、真鍮製の鏡の円形の縁に向かっていった。

「これは一体何なんだ？」ヒューゴンは占星術師と彼のムーンウィンドウから一歩下がって尋ねた。「何が起こるんだ？」彼はテーブルから短剣を引き抜いた。「一体何が起きているんだ？」

占星術師はヒューゴンを見上げ、くすくす笑いながら涙を流した。そして肩をすくめた。「彼の母親だ。」

彼は親指で額に十字を切って、涙ぐみながらも笑い続け、立ち上がってユゴンの方を向いた。「聖ドニよ、我らをお守りください。」

ヒューゴンは短剣を占星術師の胸に押し当てた。「落ち着け！話せ！」

男はぎこちない口調で答えた。「彼の母は いや 彼女についてはお話しできません、閣下！」

彼はヒューゴンの腕をつかんだ。「ここではダメだ！今はダメだ！ダメだ！」

ヒューゴンは振り返り、ムーンウィンドウをテーブルから叩き落とし、ホールの向こう側へ飛ばした。ムーンウィンドウは恐怖に怯える使用人たちの前に止まった。ヒューゴンは刃を占星術師の首に押し当てた。「彼の母親はどうなった？」

男は失禁し、泣き出した。

ヒューゴンは彼に詰め寄った。「彼女は誰だ？」

「彼女は お願いですから、閣下。」

ヒューゴンは刃を顎の下に押し当てた。

「彼女はリルです 閣下、私たちはそうしてはいけません！」

ヒューゴンは血を少し引き出した。「ちっちゃな…ちっちゃな何だって？」

「いいえ」と占星術師はきっぱりと言った。「殿下、今は結構です！」

「今だ！」ヒューゴンは唸った。

「リリス！ヘイレル！ルシファエル！モーニングスター！彼女にはたくさん名前がある！」彼はそう叫んで倒れ込んだ。

床に倒れ込み、自己陶醉に陥り、泣きじゃくる惨めな男へと崩れ落ちた。

「ワッホーン！ワッホーン！」城の広間の外で戦いの角笛が遠くから響き渡った。ヒューゴンは広間の鉄の留め金で半分閉められた二重扉に注意を向け、部下たちに入口をもっとしっかり守るよう合図した。広間の外では、遠くから聞こえる切迫した戦闘開始の合間に、二重扉の外で即刻防衛せよという慌ただしい命令と、死にゆく兵士たちの悲痛な叫び声が重なり合って聞こえてきた。扉は

拳やハルバードの打撃音と打ち鳴らす音で揺れ、そして、抑えられた切迫した叫び声によって強調された緊張感が漂っていた。

ホールの内部は墓場のような静寂に包まれ、何百もの視線が二重扉に注がれていた。ラザロが身を寄せ合っている召使たちに目をやると、泣き叫ぶ子供や女たちの間を縫って進む一人の少年が目に入った。少年は月窓の近くにしゃがみ込み、自分に視線が向けられているかを探していたが、ラザロの視線に気づいた。

彼は目に光を宿らせ、ラザロの方を指さすと、人差し指を唇に当て、ムーンウィンドウを手に取ると、来た道をこっそりと戻っていった。

ラザロはユゴンに目を向けると、彼がくるくと回りながらダルシクルの頭に向かって「一体全体、神の名において」と言っているのを見つけた。

表面的には、ユゴンの短い視線は、そこから何か啓示を得ようとする試みを示唆していた。

何らかの戦略が明らかになるかもしれない。たとえそれがどんなに馬鹿げたものであっても、敵の要塞を確保した後、彼を攻撃するという戦略かもしれない。しかし、彼はすぐに切り落とされた首と、自身の支離滅裂な計算を退け、打ちひしがれた占星術師の方を向いた。「彼女って誰だ？この多くの名前を持つ悪魔の女は何者だ？」

ドーン！巨大な爆発がホールの基礎を揺るがした。屋根の石がホールの中央の床に激しく降り注ぎ、召使いや兵士たちは命からがら逃げ散った。爆発の凄まじい威力で、警備兵は皆地面に叩きつけられた。屋根から瓦礫が降り注ぎ、濃い塵の柱が床にこぼれ落ち、キノコのように広がり、ホールの隅々まで舞い上がる砂塵と灰で埋め尽くした。そして、その余韻の中、人々がぎこちなく体勢を立て直した、束の間の静寂の瞬間、最後の塵が落ち着き、息を呑むようにホールに静寂が訪れた時

女と子供たちは悲鳴を上げ、男たちは慌てて後ろに隠れ、剣士の輪はラザロから逃げ出し、ラザロは床近くにうずくまり、目の前に現れた存在に飛びかかろうとしているように見えた。耳を後ろに倒し、目を大きく見開き、翼を広げ、牙を構え、ラザロは消えゆく霧が露わにしたものにシューッと威嚇音を立てた。彼の前に、豚の巨人が翼を羽ばたかせ、爪を空中に振り回し、牙を突き上げ、城を揺るがすほどの轟音とともに自己紹介をした。

壁石。

崩れかけた天井のアーチの下では、巨大な樫の柱が、支えとなる石の重みで次々と砕け散り、折れていった。まるで崩れ落ちるバベルの塔のように、ホールの屋根のさらに多くの部分が天を支えきれなくなった。まるまる一部が崩れ落ちた。それらの石は、まるでトールのハンマーの一撃のように地上に落下し、兵士たちの列を押しつぶした。無傷の兵士たちは獣と交戦し、クロスボウ兵と弓兵は武器を放ち、最も近い側面に矢やボルトを撃ち込んだ。第二波の矢が正面に命中すると、巨人は咆哮を上げ、よろめきながら彼らの方を向いた。しかし、巨人はただ重々しく唸るだけで、前進はしなかった。それどころか、巨人は彼らを追い払い、黒い目をラザロに向けた。

「やっちまえ！」ヒューゴンは叫びながらテーブルの後ろに飛び込み、床を這いずり回った。彼はうずくまって泣いている占星術師のそばを駆け抜け、その下に身を隠した。

テーブル。ローブをまとった高官たちが彼の後に続き、テーブルの下に群がった。彼は自分の縄張りを守るために彼らと戦った。

ラザロは、豚の巨人がテーブルの脇に退くのをじっと見つめていた。そして彼は、背中を丸めた巨人が爪を広げ、翼を広げたまま前進し続ける様子をじっと見守っていた。その巨人の剛毛で血の気のない皮膚の壁には、さらに多くの矢が降り注いでいた。ラザロは立ち止まり、くると向きを変えた。そして壁に背を向け、翼のある巨人を睨みつけた。目と目が合った 空飛ぶ人間と空飛ぶ獣 ラザロは同じように揺るぎない姿勢を取り、身をかがめ、両腕を広げた翼の下に置き、悪意に満ちたシューという音を放った。

巨人は鼻を鳴らし、ラザラスに突進した。その強大な爪はテーブルを吹き飛ばした。しかし、テーブルが粉々に砕ける前に 壁にぶつかる前に 怪物はもう一方の腕を群がる男たちの群れに振り下ろし、彼らをホールの床に転がし、ねじ曲がった残骸の散乱した塊へと変えた。悪魔の爪のしっかりとした手に握られたヒューゴンは、まるで呆然としたか弱い人形のようなだった。ラザラスが逃げようと振り返ると、巨人は飛びかかり、牙の先を壁に叩きつけた。閉じ込められたラザラスはゆっくりと振り返り、その瞬間、巨人の目に自分の姿 光沢のある黒い表面に映ったエルジョ自身の姿 が映っているのを見た。ラザラスの髪は獣の腐敗した息で揺れた。怪物はラザロを牙の間に挟み込み、壁に押し付けたままにしていた。

「助けてくれ、空飛ぶ男よ」ヒューゴンは、その獣の固い抱擁の中で喘ぎながら言った。獣はヒューゴンを牙の下に押し込み、ラザロの近くに連れて行った。ヒューゴンは、まるでこの恐ろしい瞬間に不気味なユーモアを見出したかのように、咳き込みながらくすくす笑い始めた。彼はラザロを見つめ、非難した。「お前がこの獣を召喚したんだ！空飛ぶキリスト教徒だとも言うのか？」巨人が目を大きく見開いてニヤニヤ笑う男をラザロから引き離し、横向きにして頭の髄を噛み砕いている間にも、ヒューゴンはそう言った。

ラザロが身をかがめ、巨大な牙の下に転がり込み、体勢を立て直した時、獣に矢と槍の雨が降り注いだ。彼は両開きの扉に向かって突進したが、水平に構えられたクロスボウの前に立ち止まった。それでも獣は彼を追いかけてきた。兵士たちはラザロに武器を向け、矢を顔面に浴びせた。ちょうどその時、彼はくると向きを変え、ホールの周囲を回り込んだ。天井から降り注ぐ塵と瓦礫の間から、ラザロは天井の大きな穴を通して星々を見つけた。しかし、慌ただしく動く巨人は、彼と夜空への射線を遮っていた。

部屋が轟音を立て、ホールの壁には広がる亀裂が刻まれ、黒い稲妻のように天井から急速に降りてきた。壁の石は崩れ落ち、廃墟の始まりとなった。ラザラスはプラットフォームの反対側を通り抜け、今は亡き女と子供たちを覆っていた三重のアーチを駆け抜けた。突然、控え壁の柱が崩れ落ち、雪崩のように石が彼の周りに降り注ぎ、落下する破片が彼を敷石の上に押し倒した。彼は転がり、石の雨の下で鬼が咆哮する中、よじ登って立ち上がった。そして、天井にできたはるかに大きな穴と、歓迎の黒い空と星の海を見た。たちまち、獣の巨大な広げた翼の後ろに空が消え、獣は彼に向かって踏み鳴らした。そして、獣は止まり、息を吹きかけた。

ラザラスは慌ててその瞬間を考えた。まるで獣が、彼がぽっかりと開いた穴から逃げようとしていることを知っていて、どんな試みも許さないと挑発しているかのようだった。そしてラザラスは、豚の巨人の明らかな俊敏さを考えると、急な上昇でその巨大な腕をかわすのに十分な速さを得ることはできないだろうと考えた。さらにラザラスは、もし幸運にも飛行中に獣の爪から逃れることができたとしても、怪物は間違いなく彼と同等のスタートを切るだろうと推測した。そして経験上、空に上昇する際には獣の強力な翼から逃れることはできないと知っていた。ラザラスはこれらすべてを考え、すぐにそれを振り払い、身をよじってその場を離れた。

スタンドオフからさらに壁の下の方にボルトで固定した。

彼は兵士たちが最初に彼を広間へ案内した方向へ駆け出し、今は無人となった城の奥深くへと続く入口に向かって突進した。矢で穴だらけになった巨人は、こぼれ落ちるモルタルの層を突き破って追跡し、岩や瓦礫の山を素早く切り裂いていった。そして、おそらく知覚や明確な出来事では区別できない瞬間に、ラザラスは爆発する入口を突き破り、崩れ落ちる石の爆風で床に投げ出された。しかし、巨人が頭を廊下の奥深くまで突き刺し、根を張り、咆哮し、崩れ落ちる壁に牙を振り回すと、彼は転がりながら立ち上がった。ラザラスは飛び出し、走り出し、角を曲がり、城の下の廊下に隣接する曲がりくねった階段を下りた。彼は階段のふもとに飛び降り、振り返ると、階段の隙間から大量の石が流れ出し、彼に向かって滝のように降り注いでいた。激しく振り回される牙が石を払い除け、追ってくる獣の巨大で地中深く潜り込む頭部が現れた。廊下の狭い空間ではその巨体を収容しきれず、壁は外側に膨らみ、天井は獣の巨大な体躯を包み込むように崩れ落ちた。それでもなお、怪物は前進を続け、廊下をますます深く突き進んでいった。

ラザラスは通路を駆け下り、見慣れた粗末なドアを通り過ぎた。

かつての監禁場所。彼はホールの曲がりくねった道を駆け抜け、アーチを回り、立ち止まった。彼が歓迎してくれる鉄の落とし戸を期待していた目の前には、死んだ兵士の山が積み重なっていた。彼は進み、山の根元近くに見覚えのある顔を見つけた。それは、眠そうな目で、近くの折れた剣の柄以外何も見つめていない、巨大な赤毛の兵士の顔だった。崩れ落ちる城の絶え間ない轟音の中、獣の轟く咆哮が彼を駆り立て、すぐに積み重なった死体から引き抜いた。彼は殺された兵士を一人ずつ動かし、壁に沿って並べた。獣の咆哮が響くたび、その新たな突きが揺れるたび、ラザロの周りの壁は、崩れ落ちる石で波打った。そして、死体を扉から十分にどかすと、彼は残りの死体を乗り越え、扉の鉄製の留め金と格闘したが、留め金はびくともしなかった。足元の敷石が動く中、彼は留め金を叩き続けた。岩で覆われた扉の頂石が崩れ落ち、鉄製の扉がたわむと、穴の入り口の周りからモルタルが流れ出した。

「開けろ！」ラザロは叫び、肩を勢いよく扉にぶつけた。すると、留め金が粉々に砕け散り、蝶番が石のモルタルから外れ、彼は崩れ落ちて埃まみれの穴の扉の上に落ちた。しかし、渦巻く瓦礫の中を、夕方の風が彼を包み込み、頭上には星が一面に広がっていた。彼はよじ登り、飛び上がり、翼をパチンと鳴らして穴の最上端をつかんだ。彼は這い上がり、足をしっかりと踏みしめ、昇りゆく月のある東の空を見上げた。

ラザロは息を吸い込み、翼に鞭を入れ、飛び立つ準備をした。すると、穴の中からキリスト教徒の囚人の声が聞こえた。「ラザロ、助けてください！」彼は振り返り、埃と暗闇の霧の中を覗き込むと、囚人たちが鎖と格闘し、崩れかけた穴の壁から繋がれた鉄枷を引き抜こうとしているのが見えた。

ドーン！ラザロのブーツの下、中庭の地面が揺れた。それは、豚の巨人が廊下を完全に掘り進み、ラザロの後を追って穴から出ようとする揺るぎない決意を暗示していた。突然、ラザロはキリスト教徒が仰向けに倒れるのを見た。鎖は崩れかけた壁から外れていた。同様に、北の男も壊れた石に足を叩きつけ、手枷を引きちぎった。

ラザロは穴のそばに身をかがめ、激しく手を振りながら叫んだ。「鎖を投げろ！」キリスト教徒は鎖の端をラザロに投げつけた。ラザロは鎖をつかみ、囚人を穴から引きずり出し、転がしながら北の男に向かって叫んだ。「さあ、お前の番だ！急げ！」

すると巨人は鎖を投げ出し、キリスト教徒はラザロが彼を安全な場所へ引き上げるのを手伝った。
「二人とも逃げろ !大きな災厄がこちらへやってくるぞ !」ラザロはそう警告してから、闇の中へと飛び去った。

北の男は、ひどく打撲した肘の痛みに顔をしかめながら地面を転がっていた。その時、両手を上げて敷地の端を回り、大きな白い種馬を落ち着かせ、抑え込もうとしているキリスト教徒の姿が見えた。驚いた馬が突進しようとして動き出すと、キリスト教徒は何度も左右にステップを踏み、馬の逃走を阻んだ。北の男は腕を抱えながら叫んだ。「また馬を盗むつもりか？」

キリスト教徒は彼を睨みつけた。「いや、私は大きな悪から馬を救いに行くのだ。」
さあ、立ち上がって手伝ってくれ !
しかし、負傷した北部の男はただ横向きに転がり、再び痛みを身を任せた。

ガシャン !彼の隣で、穴の壁が内側に崩れ落ち、石が急速にその空洞を埋め尽くし、穴の外から塵の柱が舞い上がった。北の男は飛び上がってキリスト教徒の方へ駆け寄り、素早く提案した。「もし私たちがそれを救おうとするなら
そしてすべてを
クリスチャンは鎖の端を彼に投げ渡し、後退して即席の移動式柵を作り、獣を閉じ込めるように指示した。ほんの数分で、彼らは馬を中庭の隅に追い詰めた。クリスチャンは馬に跨り、仲間を後ろに乗せ、中庭から城門へと馬を駆り立てた。白い馬は城壁を駆け抜け、猛烈な疾走で地面を叩きつけた。

「つまり、空飛ぶ男がお前を地獄の底から救ったってわけか !北の男よ、それについてどう思う？」キリスト教徒は肩越しに、轟く蹄の音に負けないように尋ねた。

北の男は唸るような風の音に負けないように叫んだ。「いや、空飛ぶ男が栄光あるワルキューレからお前を奪ったんだ。だから、お前のジャ・ゼウスはもう少しお前を待つことになるだろうな？」

「ああ、神は気にしないよ」とキリスト教徒は彼に言い返した。「だが、君の77人の処女たちは同じように許してくれるとは思えないな !」
北部の男は彼の肩を力強く叩いた。「キリスト教徒よ、言葉遣いには気をつけろよ。」

かつての坑内囚人たちは、月明かりに照らされた平原を駆け抜け、夜の自由へと飛び出した。その時、彼らはちらつく月と、月の丸い黄金色の窓を横切る、小さくてもはっきりと見える一人の空飛ぶ男のシルエットを発見した。

【第16章終了】



この文学作品は

d専ら献身的に

エドガー・アラン・ポー (1809年 - 1849年)

—彼の遺志が私たち一人ひとりの心の中で生き続けることを願います—



~[GothicNovel.Org](https://www.gothicnovel.org)~